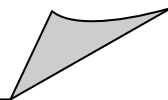


資料 1

特別支援教育研修会の記録

平成26年8月1日



平成 26 年度特別支援教育研修会 開催要項

研究会主題

特別支援教育における「キャリア教育」と「生徒指導」

～ 障害のある児童生徒の社会自立に向けて、学校種を越えた指導・支援・連携を進めるために ～

< 目 的 >

- ・分科会や講演を通して、「特別支援教育」「キャリア教育」「生徒指導」の各観点から教育実践を見つめ直す。
- ・児童生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について整理するとともに、参加者全員のスキルアップを図る。

< 日 程 >

9:30	10:00	11:30	11:50	13:10	15:15	15:45
受付	開会 基調講演	研究紹介	昼食 校内見学	分科会	全体発表 閉会	

< 講 師 >

北海道教育大学函館校	准教授（本校学校評議員・研究アドバイザー）	北村 博幸 氏
今金町立今金中学校	教諭（今金町特別支援教育スーパーバイザー）	小室 育恵 氏
北海道檜山北高等学校	教諭	石崎 洋志 氏
北海道檜山北高等学校	教諭	小泉 卓哉 氏

開会・基調講演（10:00～12:00 体育館） 進行：研修部 近藤 和也

開会のあいさつ・講師紹介 校長 高嶋 利次郎
基調講演

① 「今金町・中学校における特別支援教育の現状と課題」

今金町立今金中学校 教諭（今金町特別支援教育スーパーバイザー） 小室 育恵 氏

② 「高等学校におけるキャリア教育の実践」

北海道檜山北高等学校 教諭 石崎 洋志 氏

③ 「高等学校における個に応じた生徒指導」

北海道檜山北高等学校 教諭 小泉 卓哉 氏

④ 「特別支援教育におけるキャリア教育と生徒指導」

北海道教育大学函館校 准教授（本校学校評議員・研究アドバイザー） 北村 博幸 氏

本校の研究紹介 研修部長 矢倉 一

校内見学（昼食 11:50～13:10 の間に同時進行）

- ・ 事前に希望申し込みをされた方を対象として行います。
- ・ 12:30からご案内します。体育館にてお待ちください。
- ・ 写真等を撮影されたい場合は、案内担当者へお申し出ください。

分科会（13:10～15:15）

- ・ 協議の柱に沿って協議を進めます。お申し込みの際、参加される皆様から申込時にお寄せ頂いた質問や事例についても協議します。
- ・ 活発な協議となりますよう、たくさんのご意見やご質問をお願いいたします。

① 「特別支援教育とキャリア教育」～協議の柱：社会参加に向けた指導・支援～

運営：北海道今金高等養護学校	教務主任	金子 亘喜
	研修部長	矢倉 一
講師：北海道教育大学函館校	准教授	北村 博幸 氏
講師：北海道檜山北高等学校	教諭	石崎 洋志 氏

場所：体育館

② 「特別支援教育と生徒指導」～協議の柱：個に応じた指導・支援～

運営：北海道今金高等養護学校	コーディネーター	高田のぞみ
	生徒指導主事	小原 雄一
講師：今金町立今金中学校	教諭	小室 育恵 氏
講師：北海道檜山北高等学校	教諭	小泉 卓哉 氏

場所：柔剣道場

全体発表・閉会（15:15～ 体育館） 進行：研修部 近藤 和也

- ・ 分科会で協議した内容について発表しあった後、閉会となります。

1 基調講演

(1) 今金町立今金中学校 教諭（今金町特別支援教育アドバイザー） 小室 育恵 氏

演題：「今金町・中学校における特別支援教育の現状と課題」



○今金の特別支援教育の推進について

- ・推進チーム会議、育ちの支援委員会、支援員の配置が充実している。
- ・保健師との関係性が強い。
- ・早期対応で救われた子どもがたくさんいた。早い段階での発見、気づき、対応が大事であることを保健師との連携で感じた。

○地域の関係機関との連携で

- ・児童相談所の巡回相談となると足を運びづらい保護者が多数おり、児童相談所の前のクッション的な役割で関わってきた。
- ・こども園に行って支援の助言も行い、保護者にとって安心できる存在になることができた。

○中学校の特別支援教育について

- ・特別支援学級の子どもは自己肯定感や自尊感情が低い。褒められる経験が少ない。叱られることが多い。
- ・障害種、障害程度が多様化してきている。
- ・中学校では高等養護学校を目指している生徒が多いため、授業が受験対策になりがちな点が少し残念である。
- ・中学校から社会自立を意識した取り組みが大事。生徒が「自分は社会を担える存在である。」と思えるような取り組みが必要。
- ・（小室氏は）生活単元学習で、作業的な取り組みを行っている。特に農作業に力を入れている。畑のものを育てる喜び、世話をする過程がキャリア教育につながるのではないかと考えている。
- ・農作業のほかにも民間の委託の仕事（味噌のパックのラベルを貼る仕事）を行っている。集中力、忍耐力、手先の巧緻性を高められる。また、生徒にとっては自身がラベルを貼った味噌が売られているということが社会に一步入ったような気持ちになり、間接的ではあるが、社会参加になる。作業学習は社会自立を意識できる取り組みであると考えている。

○最後に

学校訪問で檜山北部は特別支援学級の実態が複雑多様化していると感じる。函館などの都市部と比べて、義務の特別支援学校が無いため、身体障害の生徒も入ってくる。

しかし、先生方が皆、専門性を持っているかといったらそうではない。先生方には自分たちの持っている引き出しをつかって試行錯誤しながら熱心に頑張ってもらいたい。悩みは尽きないと思うが、着実に進んでいるのは間違いない。さりげなく手をさしのべていくようなアドバイスができるようになればいいな、と自分自身は思っている。

特別支援教育は特別だけど、基本の教育。普通学校でも困り感のある生徒にぜひ今日のことを参考に関わってほしい。

○質問

- Q. 農作業を行うことになったいきさつと、今後の流れについて教えてほしい。
- A. 農作業は生きているものを育てること。自分の経験から、生き物を育てることは生きがいにつながると考えているため、育てる喜びを感じさせたかった。収穫した後は、収穫した喜びを調理学習で感じさせたい。自分たちで育てたら、こういうふうにおいしくできた、来年こういうものを育ててみよう、など考えさせたい。
- Q. 普通中学校では芸体教科や学級活動は母学級で行うと思うが、多動の生徒と関わる際に必要なことは？
- A. 配慮。なるべく指導者がつけるときはつく。職員間で年度初めなど早い時期に研修を行う。全体に説明した後に個別に説明する。机間巡視の際に、ついて見たり、一斉指導の際に個別で説明したりする。気分がのらないときには無理させない。何が何でも交流学級に行かせるのではなく、実態に応じて臨機応変に対応する。

○事前アンケートより

- Q. 通常学級から特別支援学級への移動を保護者にどう伝えればよいのか。
- A. 何が何でもすぐ特別支援学級ではない。そのクラスでできることをやってみるべき。そのためには実態把握が大事。そのひとつとして発達障害のチェックリストにプラスしてコーディネーターの先生に心理検査を実施してもらい、良さや課題を細かくアセスメントしてもらって、どんな手立てを行うか検討することが必要。まずは今の学級でできることを探す。その後結果を保護者に伝える。その子の能力に合わせて、例えば数学だけ個別にする、原稿用紙のマスが大きくする、教材を見直す、など、可能な範囲で通常学級でやってみる。それでも難しかった場合は児童相談所の巡回相談や医療機関を紹介する。保護者と根気よく向き合うことが大切。本人の将来像をイメージしてください、と伝えている。その子にどうなってほしいか、歩み寄り、が大事。プロセスのひとつひとつを大事にして歩み寄ることが大事。

(2) 北海道檜山北高等学校 教諭 石崎 洋志 氏

演題：「高等学校におけるキャリア教育の実践」



○キャリアガイダンスとは

- ・進路指導部と、総合学科を推進する部署を一緒にした。進路指導もキャリアについての取り組みを行っている。
- ・本校では将来大人になって社会に出たときのために、その生徒に合った指導を行うことを一番に考えている。
- ・キャリア教育、科目選択、進路サポートの3つのアプローチを行っている。

○キャリア教育

- ・入学当初から「キャリア」という授業を行っている。
- ・どこに行ってもみんな社会に出て生きていかなければいけない。この力を育成しないと社会で生きていけない。そのため本校で指導している。

- ・生徒には自分と向き合うこと、進路と向き合うこと、自分のキャリアをデザインすることが必要だと伝えている。

○学習単元の設定

- ・自己理解、職業理解、社会認識、履修計画作成の4本の柱で単元を組んでいる。

○系統立て

- ・1学年は宿泊研修で職場見学、9月に自分史作成、11月に上級学校見学を行う。
- ・2学年は7月にインターンシップ、2月にライフプランの発表を行う。
- ・「主体的に自立した」を意識させることが本校のポイント。

○SST

- ・1年生の6・7月に行っている。
- ・話し方について生徒に考えさせる。実際に2通りの方法でやってみる。良い例、悪い例を提示し、何が良かったか、何が悪かったか考えさせて、生徒にも取り組ませる。
- ・現在は生徒の話し方、間の取り方の変化が歴然。現在は生徒の実態が変わってきているため、内容も合わせて見直していかなければならないと考えている。

○質問

Q. 中学校段階で何が身についていると高校段階で生きる力はあるか。

A. 個人的には、挨拶だと思う。挨拶できないと就職したときに採用されない。「こいつ何なんだ。」と思われる。そこからスタートするとマイナス。挨拶したいという思いはあっても恥ずかしくて出来ないという生徒もいる。通り過ぎてもそれが先生か気付いていない生徒もいる。視野が狭い。

もうひとつは周りが見られるようになること。この2つに共通なのは、相手を思いやれること。そういう生徒は挨拶もできるし、周りも見られるのではないかと思う。

Q. 自分史をつくる活動では、様々な家庭環境の生徒もいると思うがどのような配慮を行っているか。

A. こういう家で育った、という内容を記入する欄はない。今自分はこういう学校にいる、こういう部活に入っている、こういう理由でこの部活に入ったのではないかと自分で分析する。暗い内容を書いた生徒に対しては、呼び出して、「これみんなの前で発表するけど、大丈夫？みんなの前で発表することでこんなマイナスポイントあるけどいい？」と確認する。内容を担任に伝えたいという意図で伝えてくる生徒もいるため、その内容は発表することを「ダメ。」とは言わない。

(3) 北海道檜山北高校 教諭 小泉卓哉 氏

演題：「高等学校における個に応じた生徒指導」



○生徒の実態

- ・檜山北高校は今金とせたなの間にあり、10年前に総合学科になった。授業だけでなく部活動に

も力を入れている。授業は座学だけでなく商業、農業の授業もある。

- ・生徒は 300 名程度でほとんど地元の子。行事に対しても力を入れている。積極的に学校の活動に参加している。
- ・マイナス面は全体的に幼いこと。周りを考えられない。精神面で弱い生徒や、特別な支援が必要な子が何名かおり、教育相談に力を入れている。

○教育相談

- ・具体的な事例として、「放課後面談」を行っている。支援員がついて 3 年前くらいからやっている。現在利用者は 6 名。コミュニケーションの能力、基礎学力の向上、インターンシップ、自己理解、面接の練習、マナーの指導に時間をあてている。対支援員の先生だとできるが、場面が変わるとできない生徒が多い。対応できる教員が不足していることが課題。

○予防的取り組み

- ・頭髮服装指導。月に 1 回行っている。最近では男子の長髪が目につく。
- ・その他、携帯電話、交通安全などの研修、メンタルヘルスの研修、性教育講話を行っている。
- ・男女間のトラブルが多い。道徳教育についても取り入れることを考えている。
- ・担任だけが指導を行うのではなく、学校全体のことと捉えて、取り組んでいる。
- ・予防で一番大事なことは日常の指導であると思っている。廊下で歌を歌ったり、口笛をふいたり、暑くて上半身裸になったりする生徒を見つけたらすぐに指導を行う。他の生徒は注意されている様子を見てやらなくなる。

○早期発見・早期対応の取り組み

- ・朝の玄関指導。校内外の定期的巡回。クラス担任の面談。
- ・Q-U の活用。表の見方の研修もおこなった。気付かなかったとしても意識してみることによって未然に防止できることも多いのではないか、と思う。

○家庭・地域との連携の取り組み

- ・支部懇談会の実施。PTA が学校祭の模擬店に参加。保護者と生徒が交流を図る。夜は教員と保護者の交流。警察との連携。情報収集。昨年は深夜徘徊が多いという情報をいただいた。

○問題行動の実際の対応

- ・懲戒とその他に分かれる。
- ・生徒の話を丁寧に聞く。
- ・特別な支援が必要な子、必要でない子では対応は分けていない。行った行動に対して行う。

○質問

Q. 特別な支援が必要な子は学力が低いという話があったが、単位が取得できないということはないのか、どのように対応しているのか。

A. 数学では、1 学年は習熟度のクラス。支援員が入り、直接指導してもらっている。放課後面談でも支援を行う。もっと難しい生徒に対しては補習、講習を行う。テストも難易度を調整し、その生徒に合ったものにする。観点別評価。それでいいのか疑問に思うところもあるが、それで単位を認めている。

- Q. 放課後面談の利用者は現在 6 名と言っていたが、自分で希望して対象になっているのか、教師が選んでいるのか。
- A. 希望はとってない。年次初めに教員の方でピックアップし、その中から優先順位を決めて行っている。状況を見ながら病院の受診を勧めることもある。

(4) 北海道教育大学函館校 准教授 北村博幸 氏

演題：「特別支援教育におけるキャリア教育と生徒指導」



○「個に応じる」とは

- 「個人間差ではなく個人内差に基づく」
- 「適切なアセスメントの実施」
- 「生徒の強い部分を活かす」
- 「得意な学習スタイルを活かす」
- 「自己肯定感を育む」

- ・個人内差を把握するには「適切なアセスメントの実施」をしなければならない。以前は「実態把握」という言葉を使っていたが、実態把握は生徒がまだできていないところを把握するもの。アセスメントはこんなことできるよ、ここが強みだよ、というものを同時に把握することを指す。
- ・「生徒の強い部分を活かす」、「得意な学習スタイルを活かす」について。個に応じるためには、アセスメントで明らかになった強みをどう生かすか検討しなければならない。短所改善型指導、長所活用型指導をうまく組み合わせることが大事。小学校では短所改善型が多く、高等養護では長所活用型が多い。知的な遅れがない発達障害の子に短所改善型をやりすぎると、あまり効果が無い。
- ・「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第 7 章 自立活動 第 3 款 指導計画の作成と内容の取扱い 2.(3) ウ「進んでいる側面を活かし遅れている側面を補う」ことを強調したい。

○得意な学習スタイル

- ・「自己肯定感を育む」について、得意なことを用いて成功体験を積むことは自己肯定感を上げることにつながる。

○事前アンケートより

Q. インクルーシブの理想的なあり方について。

A. 2 つの視点が大事だと思う。1 つ目は地域の小学校に入学するのが普通だと思うが、特性によっては特別支援学校に通うことになっても、その生徒にとって望ましい教育であれば、それでいいと思う。2 つ目は障害のない子が障害のある子を理解することが大切であること。地域の同級生として当たり前と考えられることが必要。